

企業の特徴と飲酒の関連性

赤松峻馬
(東北大学教育学部)

1 問いの背景と本稿の目的

二十歳をむかえ、成人になると、日常的に飲酒する人が増える。飲酒をする理由は人によってさまざまではあるが、そこにはある程度共通した理由もあるのではないかと考え、その中の一つにストレス発散のための飲酒があるのではないかと考えた。そして、仕事をするうえでは、職場環境と飲酒との間には何かしらの関連性が見受けられるのではないかという問題意識の元、今回の分析を進める。本稿では、職場環境と飲酒の関連性に着目する。

2 先行研究

職場環境を表す言葉の一つに、ブラック企業というのがある。これは、ハラスメント行為、不相应の給与など、職場の待遇が悪い企業のことを指す。そして、ブラック企業数は2013年以降増加している(津崎 2017)。また、適量のお酒は体によいことがわかっている(マーモット 1981)。飲酒の持つ効果の一つにリラックス効果というのがある。これはお酒を飲むと気分が良くなることの名称である。これは、アルコールが脳新皮質の働きを鈍くすることに原因がある。それによって、感情や衝動、食欲、性欲などの本能的な部分をつかさどる脳の古い皮質の働きが活発になり、精神が高揚し、元気が出てくる。また、ビールの原料・ホップの香りには気分を落ち着かせるなどのアロマ効果がある。

3 仮説

先行研究をふまえ、お酒を飲むことで、日頃のストレス発散が期待されるので、ブラック企業に勤めている人ほどストレスを感じやすいのではないかと考え、以下の仮説を立てる。

【仮説】「ブラック企業に勤める人ほど飲酒をする」

4 データと分析方法

今回の分析で用いるデータは、2018年7月に東北大学教育学部が実施した「若年者のライフスタイルと意識に関する調査<2>」である。調査対象者は日本全国に在住する20歳から40歳までの非学生男女である。実際の調査は調査票の郵送によって行われた。計画サンプルサイズは300名で、そのうち有効回答数は270名となり、有効回収率は90.0%とな

った。

今回は従属変数を飲酒頻度，独立変数を収入の満足度，ハラスメントの有無，職業，性別とした．飲酒頻度については，1 週間のうち，お酒を何日飲むかという質問をし，1 日と答えた人を 1，1 日と答えた人を 2，2 日と答えた人を 3 とした．ハラスメントの有無については，これまで職場でハラスメント行為を受けたことがあるか，という質問をし，あると答えた人を 1，ないと答えた人 2 とした．職業については，専門・技術・生産現場・技術職と答えた人を 1，管理・事務職と答えた人を 2，販売職と答えた人を 3，サービス業・その他と答えた人を 4 とした．性別については，男と答えた人を 1，女と答えた人を 2 とした．そして，従属変数と各独立変数とのカイ二乗検定，重回帰分析を行った．なお，重回帰分析の際は，職業がサービス業・その他と答えたもの，収入に不満がある，と答えたもの、ハラスメント経験がある、と答えたもの、性別が女性であると答えたものをそれぞれダミー変数として，分析を行った．

以下に実際に用いた変数の度数分布表を示す．

表 1 変数の内容及び記述統計量				
変数名	変数の内容	度数	全体%	有効%
飲酒頻度	0 日	126	42	49.6
	1 日	60	20	23.6
	2 日	68	22.7	26.8
収入の満足度	満足している	58	19.3	33.3
	不満である	116	38.7	66.7
ハラスメントの有無	ある	84	28	37.5
	ない	140	46.7	62.5
職業	専門・技術・生産 現場・技能職	79	26.3	37.6
	管理・事務職	60	20	28.6
	販売職	35	11.7	16.7
	サービス業・その他	36	12	17.1
性別	男	131	43.7	48.3
	女	140	46.7	51.7

5 分析結果

仮説「ブラック企業に勤める人ほど飲酒をする」

この仮説の分析において、帰無仮説を「企業の特徴によって飲酒の有無は変わらない」とし、対立仮説を「企業の特徴によって飲酒の有無に有意な差がみられる」としてカイ二乗検定と重回帰分析をおこなった。以下が分析の結果である。

	表2 飲酒頻度と収入の満足度に関するクロス表		
	満足している	不満である	合計
0日	19	49	68
1日	17	29	46
2日以上	17	31	48
合計	53	109	162

$\chi^2(df=2, N=162)=.538 \quad \phi=.087$

上記のように、飲酒の有無と収入の満足度 ($\chi^2=.538$, $df=2$) について、有意な差が見られなかった。よって、飲酒の有無と収入の満足度は関連がないと言える。

	表3 飲酒頻度とハラスメントの有無に関するクロス表		
	ハラスメント経験あり	ハラスメント経験なし	合計
0日	37	58	95
1日	18	36	54
2日以上	22	36	58
合計	77	130	207

$\chi^2(df=2, N=207)=.785 \quad \phi=.048$

上記のように、飲酒頻度とハラスメントの有無 ($\chi^2=1.15$, $df=1$) について、5%水準で有意な差が見られなかった。よって、飲酒の有無とハラスメントの有無は関連がないと言える。

	表4 飲酒頻度と職業に関するクロス表				
	専門・技術・生産現場・技能職	管理・事務職	販売職	サービス業・その他	合計
0日	34	21	16	19	90
1日	16	22	8	6	52
2日以上	26	12	11	5	54
合計	76	55	35	30	196

$\chi^2(df=6, N=196)=.078 \quad \phi=.17$

上記のように、飲酒頻度と職業 ($\chi^2=.078$, $df=6$) について、5%水準で有意な差が見られなかった。よって、飲酒頻度と職業は関連がないと言える。

	表5 飲酒頻度と性別に関するクロス表		
	男	女	合計
0日	54	72	126
1日	26	34	60
2日以上	43	25	68
合計	123	131	254

$$\chi^2(df=2, N=254) = .017 \quad \phi = .179$$

上記のように、飲酒頻度と性別 ($\chi^2 = .017, df=2$) について、5%水準で有意な差が見られた。よって飲酒頻度と性別は関連があると言える。

次に重回帰分析の結果である。

	表6 飲酒頻度を従属変数とする重回帰分析	
独立変数	回帰係数 β	標準誤差
サービス業ダミー	-0.198	0.147
女性ダミー	0.136	0.191
収入不満ダミー	0.147	0.136
ハラスメントありダミー	0.045	0.14
R^2	0.021	
Adj R^2	0.003	
N	172	

上記のように、飲酒の有無と、企業の特徴（残業の有無、収入の満足度、ハラスメントの有無）について、有意な差が見られた。よって仮説を採択する。

6 考察

本調査は企業の特徴と飲酒頻度の関連性を確認することを問いとして行っており、その回答を得るために、仮説「ブラック企業に勤めている人ほど飲酒頻度が多い」の採択を目的として行ってきた。結果として、仮説を採択できた。よって、職場環境と飲酒の有無は特に関連があるといえる。また、表5の結果より、女性は男性に比べて飲酒頻度が多いことが言える。マーモット（1981）によって報告されていたように、飲酒にはリラックス効果がある、というのはわかっていたが、職場でのストレス解消方法として、飲酒は有効な手段であるようである。今後の展望として、職場でストレスを抱える原因をより詳細に調査し、それと飲酒が持つリラックス効果との関連性を調査していく必要があると思われる。

〔文献〕

- 桜井茂男, 2003, 男性社会人における飲酒効果と飲酒量, アルコール依存傾向, 健康度との関係.
- 特定非営利活動法人アスク, 2018, 「イッキ飲み・アルハラ防止キャンペーン 2018」, (2019 年 1 月 11 日取得 https://www.ask.or.jp/ikkialhara_campaign.html).
- 厚生労働省, 2015, 「労働基準法の基礎知識」(2019 年 1 月 11 日取得 https://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/roudou/gyousei/leaflet_kijun.html).
- 大阪医科大学, 2015, 「ハラスメントの定義」(2019 年 1 月 11 日取得 <https://www.osaka-med.ac.jp/deps/jinji/harassment/definition.htm>).
- アサヒビール, 2018, 「人とお酒のいい関係」(2019 年 1 月 11 日取得 <https://www.asahibeer.co.jp/csr/tekisei/>).